

## オイラド・モンゴルのアイデンティティに関する研究 —カルムイクの文化・宗教復興を中心に—

那 木 加 甫

総合研究大学院大学文化科学研究科 博士課程

### はじめに

オイラド・モンゴルはかつて中央ユーラシアにわたる大帝国をたてたがその政権の崩壊により、彼らの子孫はロシアのイジル河畔(現在のカルムイク共和国)から中国東北の大興安嶺までに分散することとなった。現在、この広い地域はロシア、モンゴル、中国といった国家に分割されている。それぞれの地域に暮すオイラド・モンゴルはマイノリティになり、マジョリティのロシア人やハルハ・モンゴル、漢族などに同化される傾向にある。しかし、各地域に分散するオイラド・モンゴルはチベット仏教を信仰することや各地域においてマイノリティであるという点で共通している。こうしたマジョリティの社会において、マイノリティであるオイラド・モンゴルはいかに自らの文化を主張してきたのか、彼らの仏教信仰をはじめとする伝統文化はその社会生活にどのような影響をもたらしているのか、などの課題はいまだに未解明であり、カルムイクをも射程に入れて調査・研究を深める必要がある。

カルムイクという言葉は、もともと中央ユーラシアのチュルク系諸民族やロシア人などがオイラドに対して用いた、他称であった。後に帝政ロシアの勢力が拡大したのに伴い、イジル河畔に残されたオイラド・モンゴルは帝政ロシアの支配下に入り、こうした他称は彼らの自称と変化していく。20世紀にソ連の社会主義政権のもとに入ったカルムイク人は苦難の道を歩んできたといえる。ソ連時代には彼らの仏教信仰が禁止され、特に1940~1950年代にシベリア流刑が行われた歴史がある。その後、1990年代のはじめにソ連が崩壊すると、カルムイクでは信仰の自由が回復され、寺院の再建をはじめとする伝統文化の復興がみられた。本稿では、カルムイク人のシベリア流刑および帰還に関する歴史過程を概観しながら、ソ連崩壊後のカルムイクにみられた文化・宗教復興運動のあり様を検討する。なお、本稿で用いる主なデータは2015年9月28日~12月29日の間にカルムイク

クにおいて実施した調査によるものである。

### カルムイク人のシベリア流刑

カルムイク人は帝政ロシア政権に圧迫されてきたが、1905年にロシアで起きた5月革命や11月革命の影響を受けて次第に政治的な発言力を増し、1918年の10月革命を経て、1920年にカルムイク自治共和国が形成された。第二次世界大戦中の「スターリングラードの戦い」のとき、一時期ドイツ軍に全面的に協力したとされ、1943年末にカルムイク自治強国は廃止された。そして、カルムイク人はすべてシベリア各地に追放された。1957年にソ連で始まったスターリン批判によって、1958年自治共和国として回復され、1991年共和国となった歴史の流れはよく知られている(佐伯1991)<sup>1)</sup>。しかし、彼らの流刑地での暮らしについての記述は稀であるといえる。今回の調査では、シベリア流刑を経験した10数人の老人に対するインタビューを通して、カルムイク人の流刑地の暮らしについて把握することができた。

カルムイク人のシベリア流刑がはじまったのは1943年12月28日のことであった。一般の人びとにとって流刑は何の前触れもなかったようである。「その日、突然ロシアの軍人が家ごとにやってきて、少量の荷物を整理して集合するように指示した。人びとは何も知らされず、荷物を持たずに行ったものや薄い服を着たまま行ったものも多かった」。それからわずか数日間でカルムイク各地の人びとをエリスタ市へ移動させ、集合したすべての人びとを貨物列車に乗せてシベリア各地へ送り込んだ。冬の1月という厳寒期であったため、列車上で凍死した人びとが多く、凍死した人びとの死体はひとつの貨車にまとめて停車する際に処理していた。そのため凍死した家族・親族の遺体の行方がわからない人びとも多い。

シベリア流刑におけるカルムイク人の収容地は、カザフスタン共和国北東部に接する今日のアルタイ共和国か

ら日本海に接するアムール州やサハリン州にかけて厳寒の地域に広く分布し、各収容地における人数は4~5家族、20人以下の単位で管理していた。収容先での人びとの職種をみると、女性の場合は主に工場を中心に、男性の場合は牧場、漁業、大工など多様であった。食生活をみると、最初1~2年の困難な時期を経て、野菜、家畜の肉、熊肉、鳥肉などが食べられるようになって、安定した食生活が保されていた。また、流刑の際に多くの人びとは仏像を持ち、常に真言を唱えることや、流刑地に僧侶がいた場合、若者に対して教育、結婚の相談などが行われるなど、流刑地において仏教は人びとの精神的支えであったことがわかる。こうした流刑地におけるカルムイク人の暮らし振りをみると、多くの人びとの生活は最初の1~2年間の困難な時期を経て、次第に安定し、1950年代に入ると現地の生活に適応していたことがうかがえる。しかし、分断された生活環境や多くの年長者や知識人を失ったことによって、民族伝統文化の継承が中断されたことがわかる。

1957年になると、ソ連政府の許可を受けて多くのカルムイク人は故郷へ帰還し、カルムイク再建が始まり、1958年にカルムイク自治共和国が回復された。しかし、この時期はカルムイク人の母語の学習が弱体化してロシア語への同化が加速し、近所付き合いも冷めていったという。こうした傾向は、シベリア流刑を経験したことによる危機感と冷戦による国内外におけるスパイ活動の増加などによって、人びとが身の安全を重視した結果であると考えられる。次の節ではソ連崩壊後、カルムイクにあらわれた文化・宗教復興の潮流について整理する。

### カルムイクにおける伝統文化・宗教復興

1990年代のはじめにソ連が崩壊した後、社会主義を経験した旧ソ連圏各地域でポスト社会主義時代における民族主義の復興について様々な視点から考察した研究が増している(山田1998, 宇山2000, 藤本2011)<sup>2-4)</sup>。しかしながら、カルムイクの伝統文化・宗教復興を扱った研究はほとんどない。なかでも1990年代以降のカルムイクの仏教復興が代表的であるが、それと同時に文芸、言語、牧畜などの復興も著しい。本節では、こうした伝統文化の復興について記述する。

#### 1. 仏教の復興

ソ連時代にはすべての宗教が禁止されていたが、カルムイク人は仏像を隠し持って祈りを続け、常に真言を唱

えるなどの信仰実践を多くの人びとが行っていたようである。仏教復興は主に寺院の建設、僧侶の教育などが代表的である。1990年代のはじめから政府の政策によって、カルムイク国内における13のセレン(行政区)において寺院を建設するとともに、アストラハン州におけるホシュド部の旧寺院遺跡に寺院を建設した。そのなかで、最も代表的なのは、カルムイク政府の資金支援や海外からの資金援助によって、2006年にエリスタ市に建設されたヨーロッパ最大の仏教寺院、「開祖金寺」である。「開祖金寺」は今日カルムイク全国のシンボルとして、巡礼者だけではなく、多くの観光客の訪問先となり、カルムイクの経済発展においても大きな役割を果たしている。他には、北のヴォルゴグラード州におけるドルベド部の旧寺院遺跡に寺院建設のため、資金調達の活動が始まっている。

カルムイク政府による努力により、アメリカにいたカルムイクの活仏、チベット仏教界における最高の活仏であるグライ・ラマ14世、新疆のオイラド・モンゴル世界における最高の活仏であるシャリワン・ゲゲン14世などをカルムイクへ招来してきた。さらにカルムイク出身の僧侶を長期にインドやチベットなど仏教界の中心地へ派遣し経典を勉強させたり、あるいは僧侶を短期に新疆の仏教寺院へ派遣し、新疆の仏教界との交流を強化するなどの政策を実行してきた。これをみると、マジョリティのイスラーム教徒やロシア人に包囲されているなかで、カルムイク人にとって仏教信仰がいかに大きな意味を持つかがわかる。

#### 2. 文芸の復興

この時期は、これまでに禁止されていた文芸家たちの活動が自由化となっていく。特にカルムイク出身の民族文芸家チャガン・ザム(Tsavaan zam)氏と歌手アルカダ(Arkady Mandjiev)氏の活躍は代表的である。ふたりは新疆のモンゴル世界、内モンゴル、北京、モンゴル国などの地域において定期的に公演し、カルムイク文化の紹介、宣伝活動を行ってきた。また、ふたりは各モンゴル地域の文化、文芸などを本国に紹介・宣伝する活動を行い、カルムイクと各モンゴル地域との文化交流の強化、カルムイク伝統文化・文芸の復興に先駆的役割を果たした。さらに、2010年前後にモンゴル国ドルベド部出身の若手歌手のジャウハラン(Samandiin Javhlan)氏を中心として始まった「ハマツグ・モンゴル文芸活動(Hamav Monvol Tösl)」にカルムイクから数人の若手

文芸家が参加し、モンゴル国、内モンゴルとロシアのブリヤート、トゥヴァやカルムイクなどの地域において公演活動を行っている。こうした活動はカルムイク民衆に歓迎されており、人びとの民族伝統文芸に対する理解の強化、文芸の復活に積極的な役割を果たしている。

他には1990年代以降、カルムイク各地で若手向けのカルムイク伝統舞踏、トブシヨル、ジャガンガル、歌などの学習クラスが開設されており、その影響でカルムイク伝統の文化や文芸が復活してきている。

### 3. 言語の復興

1990年代以降のカルムイクにおける言語の復興は、前述の仏教、文芸のように盛んになっていないように映える。カルムイク語のコースが、各小学校・中学校・高等学校に設定され、教育のなかでも重視している。とはいえ、若い世代のカルムイク語能力を心配する声がよく聞かれる。しかし、彼らは嘆息するばかりではなく、具体的な行動を起こし、民族言語を復興しようと奮闘している事例もいくつかあげられる。一に、「開祖金寺」においてカルムイク語コースを設けられていること、二に、カルムイク国立劇場が、カルムイク語現代劇を専門的に演じる部門を設け、民族言語の宣伝に励んでいること、三に、個人レベルでカルムイク語コンクールを組織し、子供たちの自民族言語学習に対する積極性を促そうと努力していることなどがみられる。

### 4. 牧畜の復興

2010年前後にカルムイクの資産家B氏は新疆のバヤンゴル州やイリ地区のトルグド部、ジュンガル部出身の5戸、モンゴル国ウブス県のドルベド部出身の5戸、合計10戸をカルムイクに移住させ、カルムイクの伝統的

牧畜を復活する試みがはじまった。現在彼らはカルムイク草原で定住しながら牧畜に従事し、現地の牧畜民に牧畜文化を指導している。そうした影響をうけ、カルムイク伝統のゲル、ゲルの飾り、乗馬、乗馬の道具に対する人びとの注目が上昇している。

### むすびに

本稿では、カルムイク人のソ連時代におけるシベリア流刑や帰還後の様子を概観したうえで、ソ連崩壊後カルムイクでみられた仏教を中心とした伝統文化の復興の事例を紹介した。こうした伝統文化の復興による文化の再構築は、ロシア人やイスラーム教徒といったマジョリティ社会におかれたマイノリティのカルムイク人社会にとって、自身のアイデンティティを強調する武器となっているといえる。また近年、新疆・モンゴル国西部からのオイラド・モンゴル人の留学生が増加するなか、カルムイク人との通婚関係が増え、さらに情報のグローバル化などの潮流のなか、カルムイク人のオイラド・モンゴルのアイデンティティが復興する傾向が強まっている。

### 謝 辞

本研究に対して奨励金を提供して下さった公益財団法人三島海雲記念財団に心より感謝申し上げます。

### 文 献

- 1) 佐伯真光：アメリカ教の風景，悠飛社，1991。
- 2) 山田孝子：サハ・ヤクートにおけるシャマニズムの復興と自然の意味，エコソフィア，1，129-147，1998。
- 3) 宇山智彦：中央アジアの歴史と現在，東洋書店，2000。
- 4) 藤本透子：よみがえる死者儀礼——現代カザフのイスラーム復興，風響社，2011。